

## 5 大学図書館職員の新たな役割

著者	竹内 比呂也
内容記述	研修：平成30年度大学図書館職員長期研修 主催：筑波大学 期間：平成30年7月2日～7月13日 会場：筑波大学春日エリア情報メディアユニオン2階情報メディアホール等
発行年	2018-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00153252">http://hdl.handle.net/2241/00153252</a>

2018.7.3

平成30年度大学図書館職員長期研修

# 大学図書館職員の新たな役割

竹内 比呂也

(千葉大学副学長, 附属図書館長, アカデミック・リンク・  
センター長, 大学院人文科学研究院教授)

# 大学図書館の基本理念

大学図書館は、今日の社会における知識基盤として、記録媒体の如何を問わず、知識、情報、データへの障壁なきアクセスを可能にし、それらを活用し、新たな知識、情報、データの生産を促す環境を提供することによって、大学における教育研究の進展とともに社会における知の共有や創出の実現に貢献する。

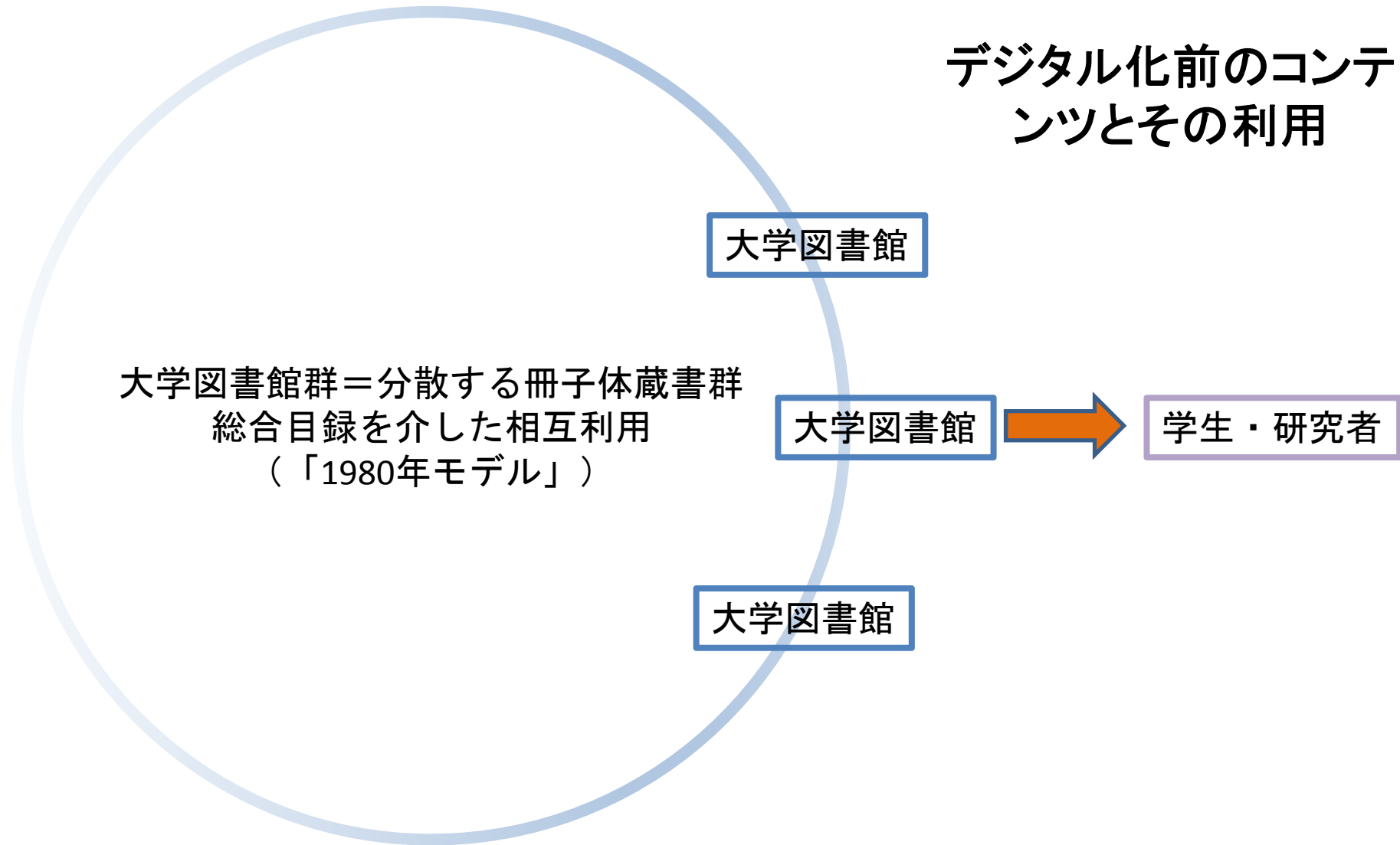
(第63回国立大学図書館協会総会にて採択)

# 三つの重点領域

- 知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有
- 知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
- 新しい人材：知の共有・創出のための＜人材＞の構築

議論の前提はデジタル化である

# デジタル化前のコンテンツとその利用



大学図書館

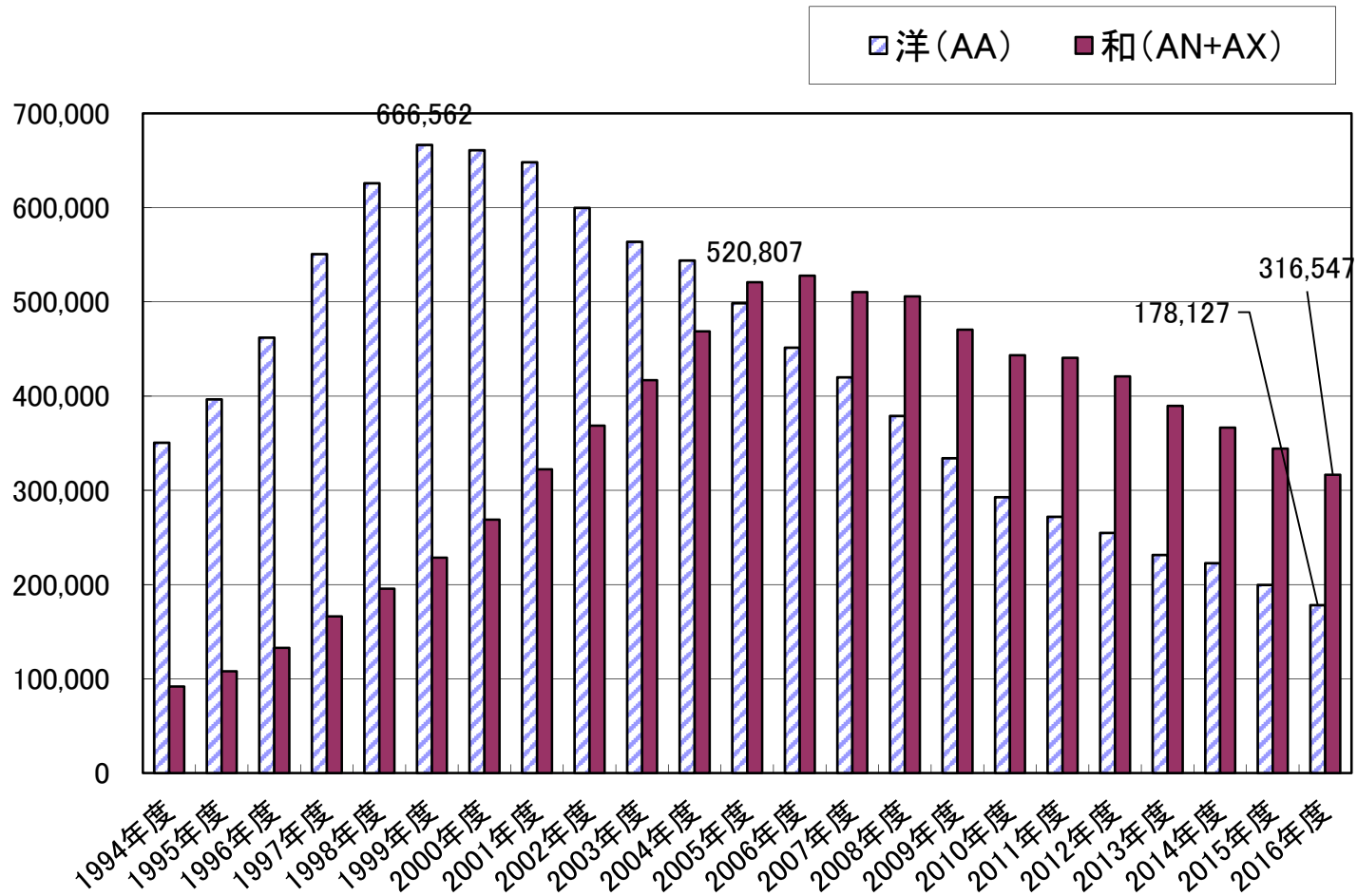
大学図書館群＝分散する冊子体蔵書群  
総合目録を介した相互利用  
(「1980年モデル」)

大学図書館

学生・研究者

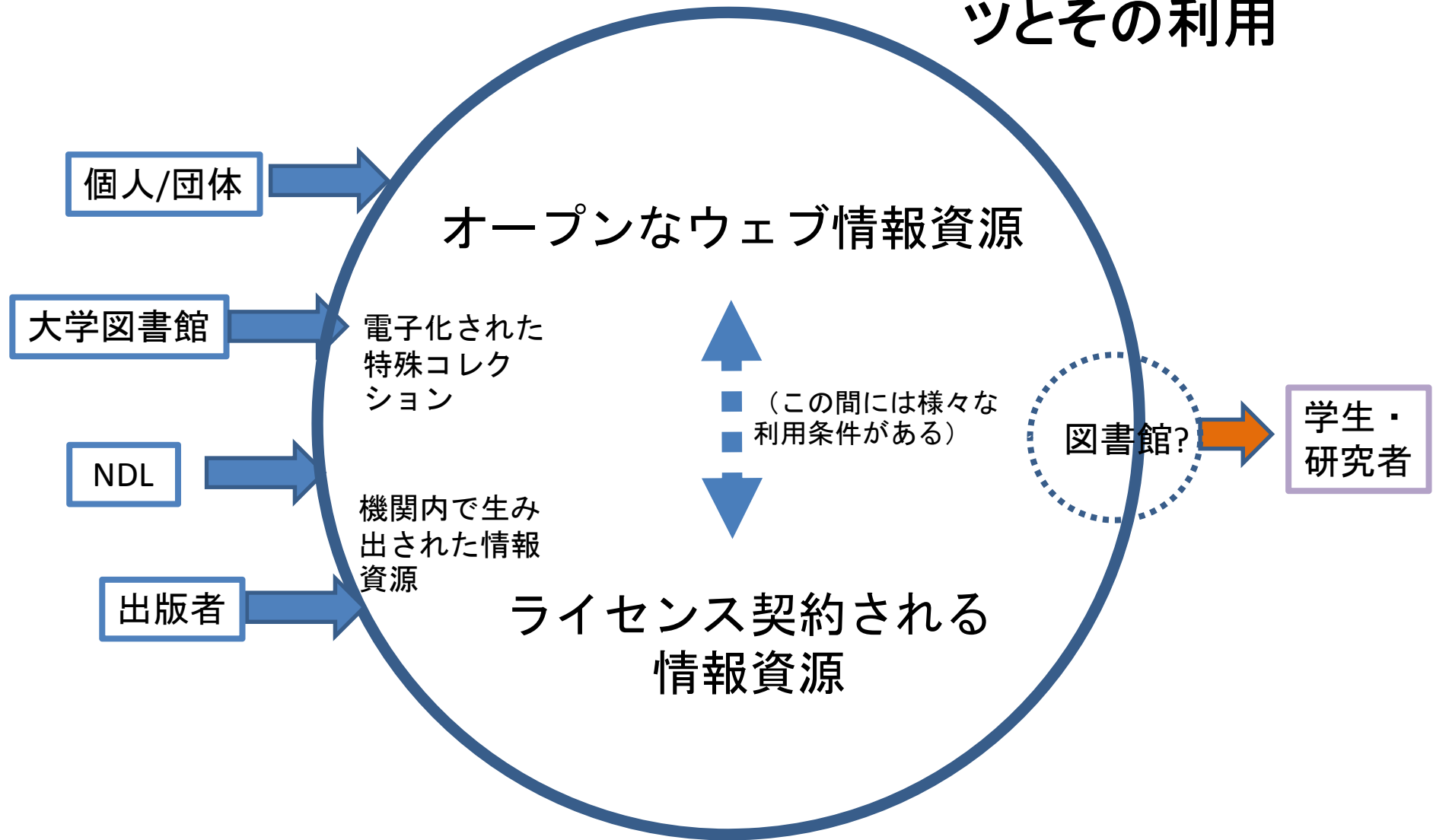
大学図書館

# 「1980年モデル」の一つの帰結： デジタル化のインパクト



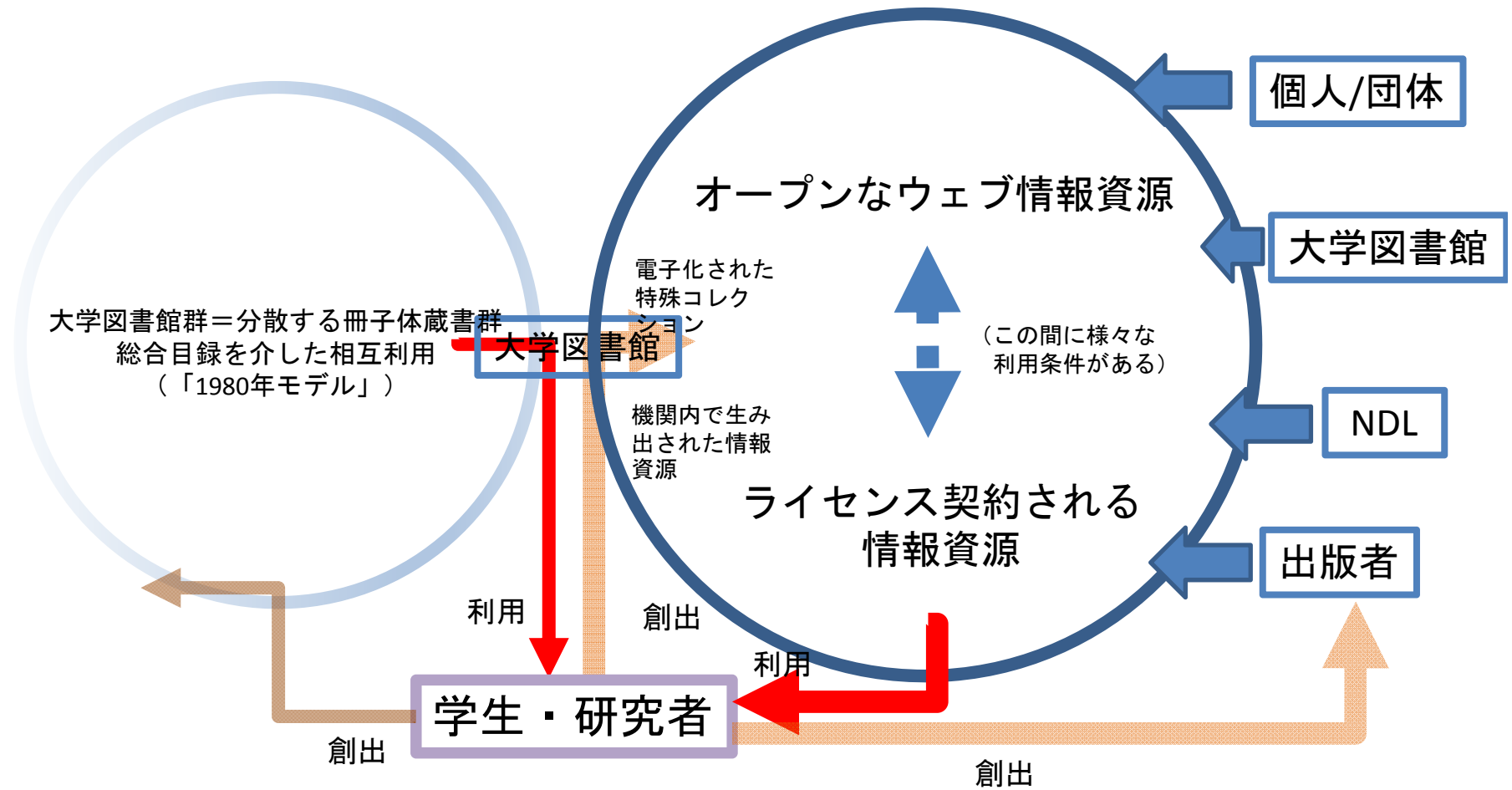
佐藤義則氏（東北学院大学）提供資料

# デジタル化後のコンテンツとその利用





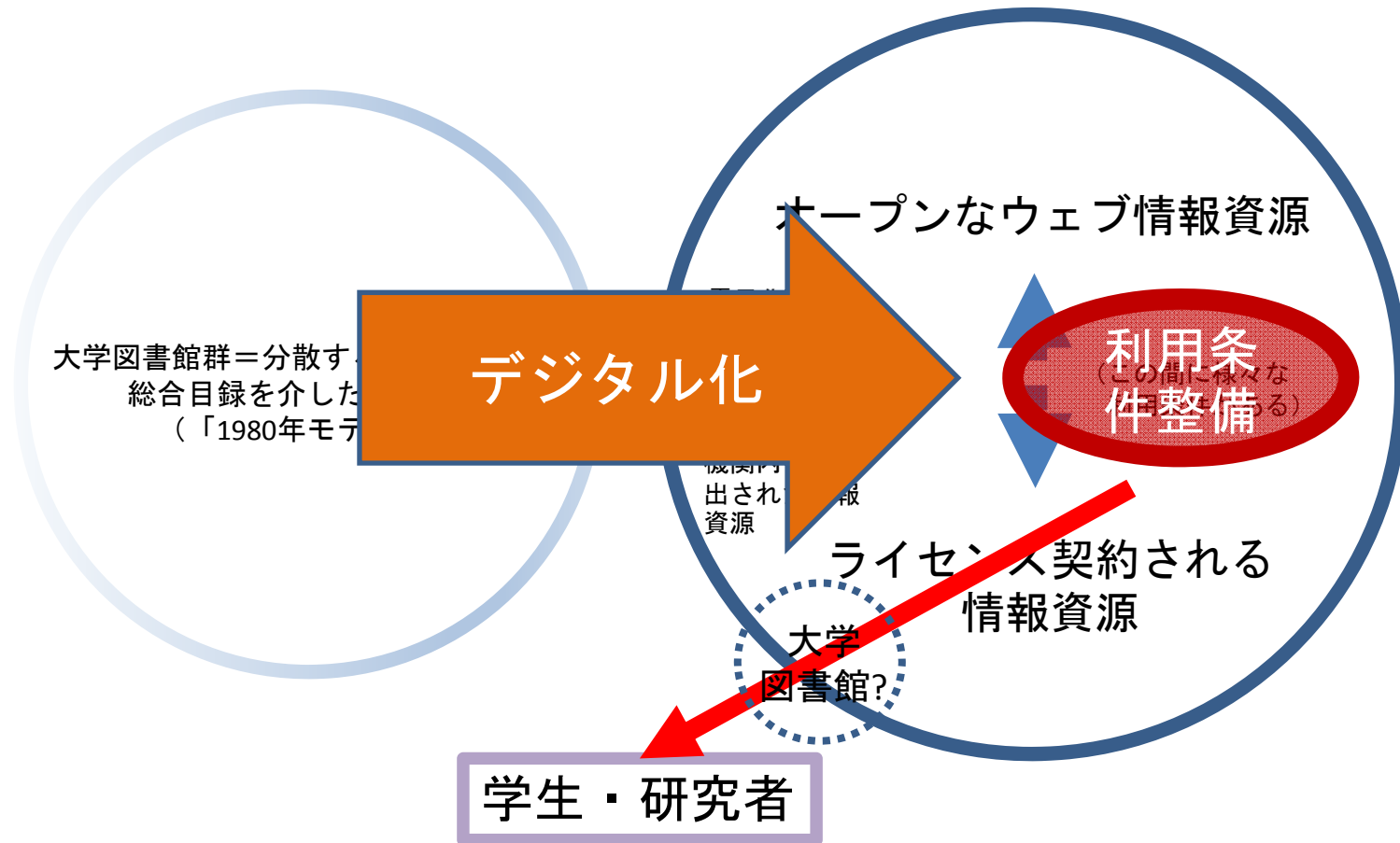
# 学術情報のランドスケープ（現状）



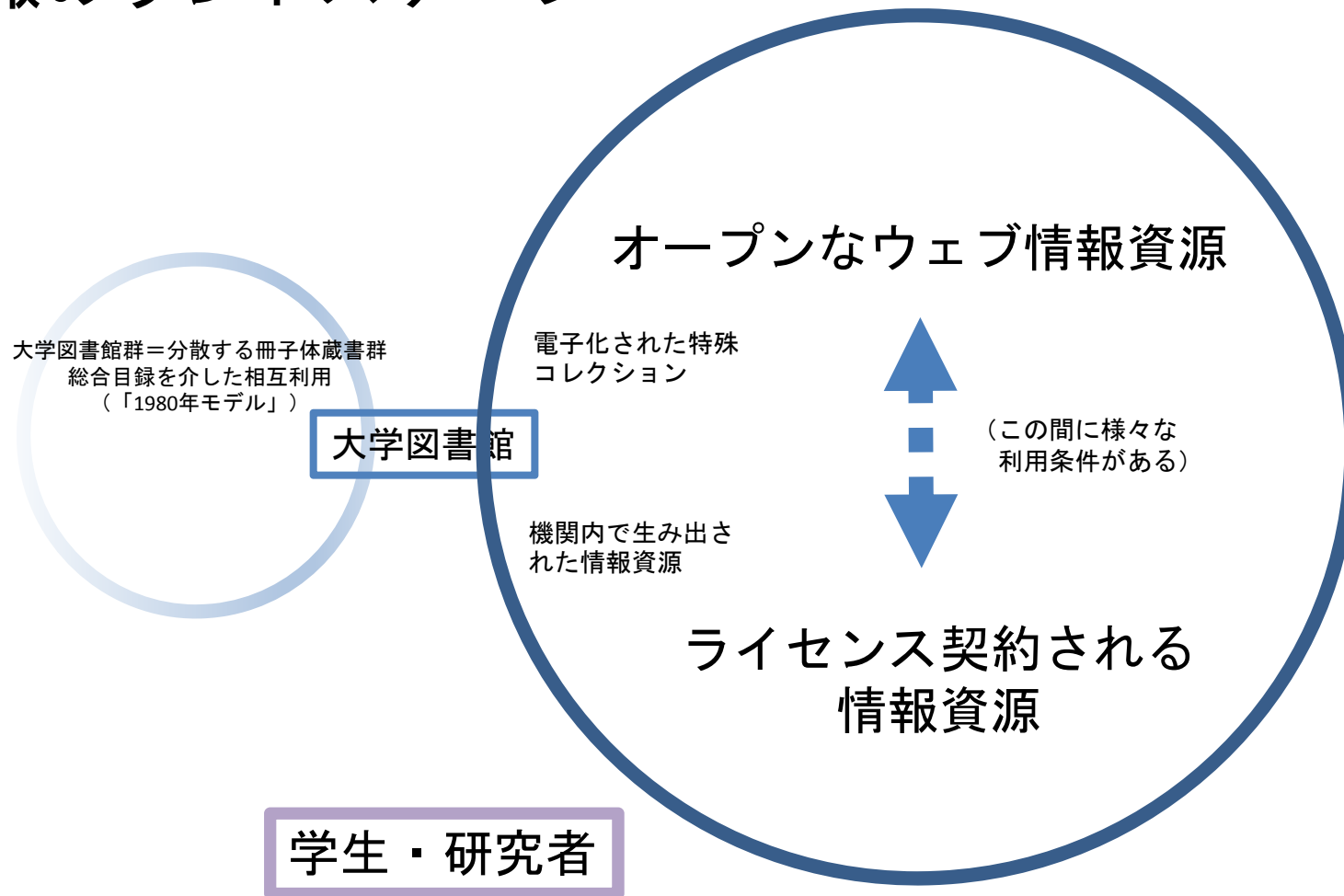
# これから

- デジタルを主とし、紙が従となることを前提として、日本国内で生産される学術情報資源の利用可能性を高めるために、学術情報基盤の全面的な再構築を検討する必要がある。
  - 紙の資料を前提としていた頃のプラクティスは一度忘れて、デジタルを主としたサービスを前提とした基盤構築の検討の必要性。
  - 集中させる方が合理的なものは集中させる／分散させる方が合理的なものは分散させる必要性。
  - 大学図書館を「利用(入手)の場」から「創出の場」へ転換させる必要性。

# 学術情報のランドスケープ



# 学術情報のランドスケープ



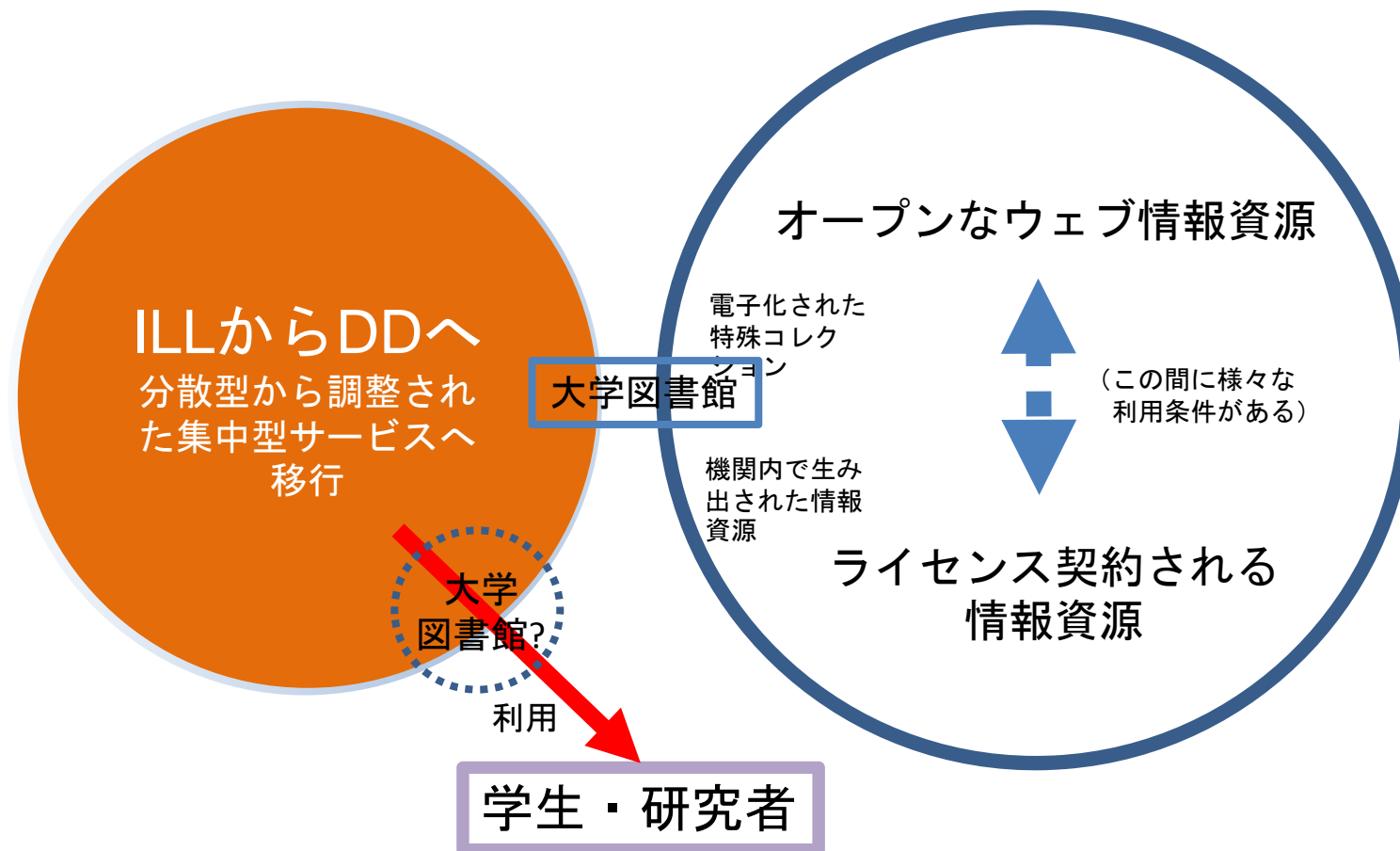
# 過去の電子図書館構築の経験から学んできたこと

- ナショナル・プラットフォーム, ディスカバリーツール(とその背景となる政策)の必要性
  - 電子化されたコンテンツはほおっておくとどこにいったかわからなくなる
- 世界的な標準に準拠した電子化の必要性
  - 電子化されたコンテンツの長期利用を実現
- 長期的保存環境の必要性
  - ダークアーカイブとしての長期保存。今誰かきちんとやっているのか？

# 今後の可能性：特にコンテンツ提供面での制度的変化

- 著作権法の改正
  - 「柔軟性のある権利制限規定」の導入
    - 全文検索, スニペット表示を誰もができるようにする環境整備
  - E-ラーニング環境での異時送信に関する権利制限(補償金制度+権利者団体の窓口の一元化とともに)
    - 学内外における著作物の教育利用についての環境整備
    - ただし教材の共有については今後の課題
  - デジタル化送信サービス(国立国会図書館)の海外への拡張
    - 日本研究資料へのアクセスの改善(不必要なILLの解消)

# 学術情報のランドスケープ



序論

# 大学図書館をとりまく厳しい環境



必要な知識の入手先という意味では、大学と書店の重要性は同時並行的に低下している

吉見俊哉「大学とは何か」(2011)

大学図書館はかつてない競争  
にさらされている。

スーザン・ギボンズ  
(2013年度大学図書館  
シンポジウムでの発言)

# 大学図書館をとりまく厳しい環境

- 『アメリカの大学では、ライブラリアン(=主題専門職)という職種が絶滅しようとしている』(石松) ⇒ (図書館員は単なる書庫の門番としてしか残らない？特に専門教育における主題専門職の役割の低下？)
- 「個別の図書館システム」を必要としない、あるいは図書館を必要としないようなOPAC／図書館システム環境の出現 ⇒ (認証のコントロールさえできれば後は利用者の思うがままに情報源を利用？)

# 大学図書館をとりまく厳しい環境

- 「大学内で『場所としての図書館が必要である』と言っているのは図書館員くらいのものである」  
(D.Schulenburger) ⇒ (図書館は完全にバーチャル化？)
- 「『情報化に対応しない図書館』や『学習に役立つ図書館』を明示的に指向しない大学図書館は大学にとって単なる巨大書庫という不良債権(!)になりかねない。」(河西)

# 最近のアメリカの話題

- アメリカ図書館協会での「未来のための組織変革」に関する議論
  - マッギル大学では、大学図書館予算が180万ドルカットされた。180人のスタッフのうち30人が退職したが、その補充はなされなかった。図書館は医学図書館を含む図書館の閉鎖、統合を決めた。
  - ミネソタ大学では、図書館が組織の見直しを行い、パブリックサービス部門を強化して「研究・学習部門」を創設し、主題リエゾン、インスタクショナルデザイン、著作権、データサービスといった専門家により専門性の高い仕事をできるようにするため、新しい管理的ポストを創設した。

# 最近のアメリカの話題

- アメリカ図書館協会での「未来のための組織変革」に関する議論(続き)
  - マサチューセッツ大学(アマーフト校)では、デジタルリソースをベースとした組織に変革するための自己評価を実施し、ユニークな電子情報資源とサービスの統合を図書館業務のメインストリームとするために図書館業務の様々な面の検討をしている。
  - MITでは2010年に組織改革を実施し、世界中に存在する、休みなく働き続ける学際的な研究コミュニティに対してサービスすることをめざすために情報デリバリー・図書館アクセス部門を設置した。

# 最近のアメリカの話題

- エモリー大学とジョージア工科大学(いずれもアトランタにある)は、書庫的機能を持つ図書館サービスセンターをエモリー大学の敷地内に設置し、2016年3月にオープンした。ジョージア工科大学はその蔵書の95%を新しいセンターに移し、空いたスペースを学習空間として再整備した。

## ハーヴァード大学図書館の 新しいミッション

- *The Harvard Library advances scholarship and teaching by committing itself to the creation, application, preservation and dissemination of knowledge.*

(2013)



その1

# 「研究」から「学習」へ：2000年代の 方向性

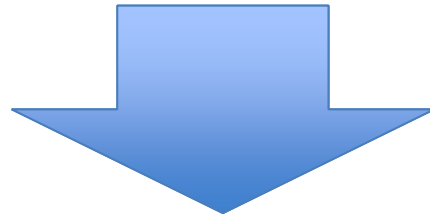
# 「研究」と大学図書館

- 「電子ジャーナル」の普及は「図書館」の可視性を著しく低下させた
  - 非来館型利用の増加
  - ILLの劇的な減少, 質的变化(REFORMの成果)
  - この現象は電子ジャーナルの購入経費が確保される限りは続く(しかしこれは怪しい??? 同時に図書そのものの電子化はいずれやってくる。)
- オープンアクセス／オープンサイエンスと大学図書館
  - ⇒ ジャーナルの「ゴールドOA化」は大学図書館を不要にするか？  
(ゴールドOAの急激な増加については注意が必要。ただし、現状では20% 程度で頭打ち)
  - ⇒ 研究との関わりについては後述

# 研究から「学習」へのシフト

- 大学院重視の高等教育政策から『学士課程教育の構築に向けて』（中教審答申、平成20年12月）への転換
  - 学習活動の活性化が大学にとっての喫急の課題
    - 「学士力」：課題解決能力の重視
    - 「単位制度の実質化」：事前、事後学習の重視
    - 「教育方法の改善」
    - 「初年次における教育の配慮」
  - 日本の場合、これまでこれを十分にやってこなかったの  
で、開拓の余地は大きい（新制大学の理念は60年経っ  
ても定着していない。例えば「単位制度の実質化」議論）

知識の習得



知識の習得

+

知識活用能力の習得

# 高等教育政策における大学図書館

- 学習・教育のサイドから図書館が果たすべき役割についての発言は希薄
  - 「21世紀の大学像と今後の改革方策について」(1998年)では大学図書館について言及されているが施設・整備の利用が中心。
- 1990年代になってようやく教育改革の機運が高まり、2000年代の教育GPで図書館を取り上げたものが脚光を浴びた(ラーニング・コモンズ)

「学士課程教育の構築に向けて」:  
学士力(中教審答申)(2008年12月)

- 専攻分野の基礎知識の体系的理解
- 汎用的技術
  - － コミュニケーション・スキル
  - － 数量的スキル
  - － 情報リテラシー
  - － 論理的思考力
  - － 問題解決力
- 態度:リーダーシップ, 倫理, 社会的責任
- 総合的な知識, 技能, 態度の活用と創造的思考力

# その後

- 中央教育審議会大学分科会大学教育部会「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」→中教審答申(2012年8月)
- 文部科学省「大学改革実行プラン:社会の改革のエンジンとなる大学づくり」(2012年6月)  
⇒大学図書館の機能強化について言及

# その後

- 教育再生実行会議第3次提言(2013.5.28)
- 第2期教育振興基本計画(2013.6.14閣議決定)  
基本施策8 学生の主体的な学びの確立に向けた大学教育の質的転換「学生の主体的な学修のベースとなる図書館の機能強化」
- 国立大学改革プラン(2013.11)
  - 人材育成の機能強化事例

ただし、どのように機能強化されるべきかといった具体策は示されていない。



# 図書館という「場所」

- ラーニング・コモンズ：単に情報機器が並んでさえいればいい！？
  - 参照『ラーニング・コモンズ：大学図書館の新しい形』  
加藤，小山編訳（勁草書房2012）
- 「図書館は蜂の巣のような場所」--Sarah  
Thomas
  - 人の活動を見る。自分の活動を見せる。それによって刺激を受ける。

# “日本型”ラーニング・コモンズは…

- 単なる空間の提供であるケースが目立つ
  - グループ学習室
  - コンピュータ・クラスター
  - ラウンジ、カフェなどのくつろぎ空間

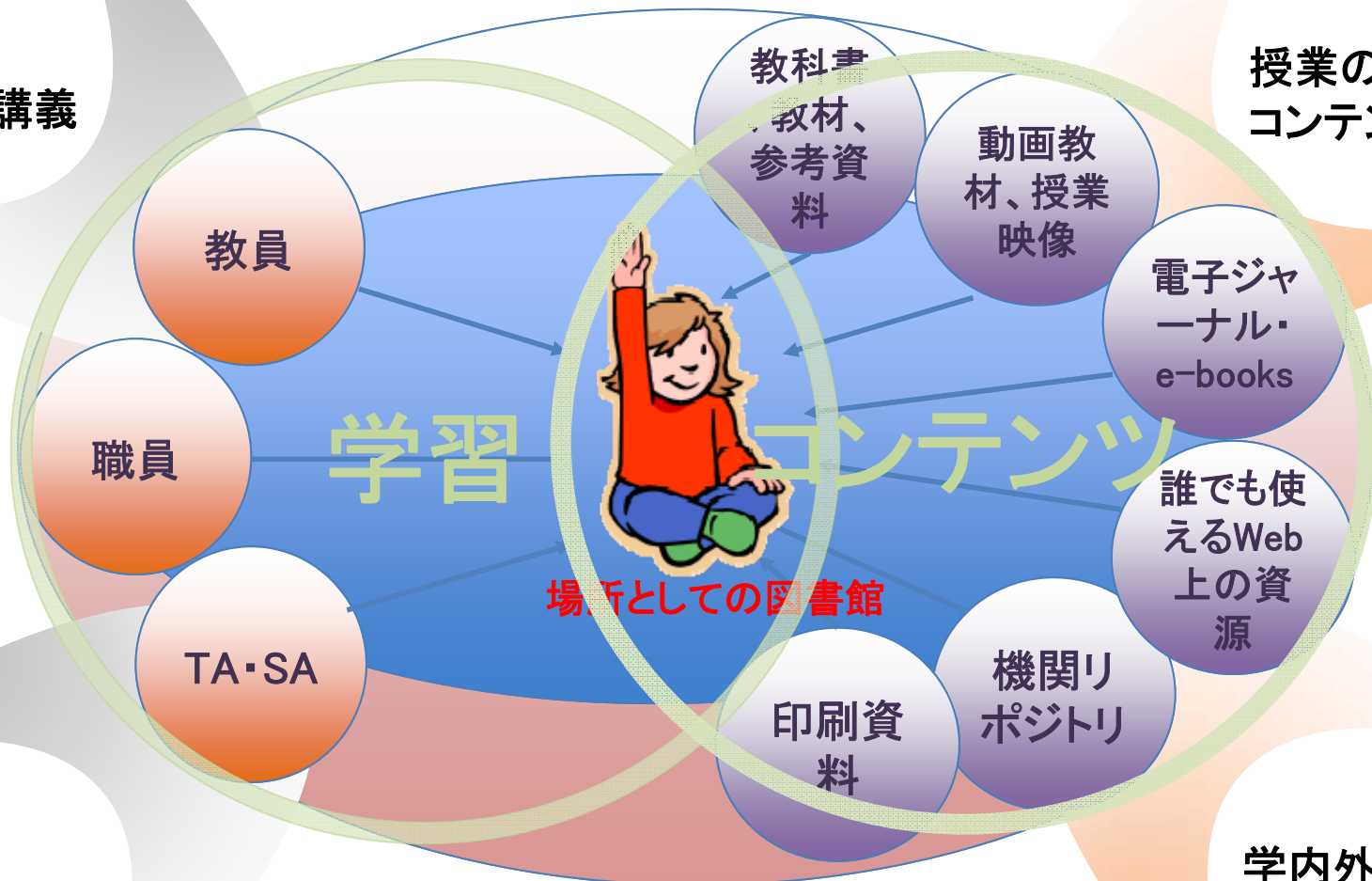
→利用者のニーズには合致しているかもしれないが、そこで働く図書館員の存在(人的支援)はほとんど何も考えられていないように見える。

→大学全体の中で図書館機能の再定義がなされないと意味を持たない。

→今日、すでに縮小に向かっているラーニングコモンズもあることに注意。

対面型講義

授業の  
コンテンツ化



TA・SA

職員

教員

教科書、  
教材、  
参考資料

動画教  
材、授業  
映像

電子ジャー  
ナル・  
e-books

誰でも使  
えるWeb  
上の資源

機関リ  
ポジトリ

印刷資  
料

場所としての図書館

学習 コンテンツ

ゼミナール

学内外で生産  
される研究成果

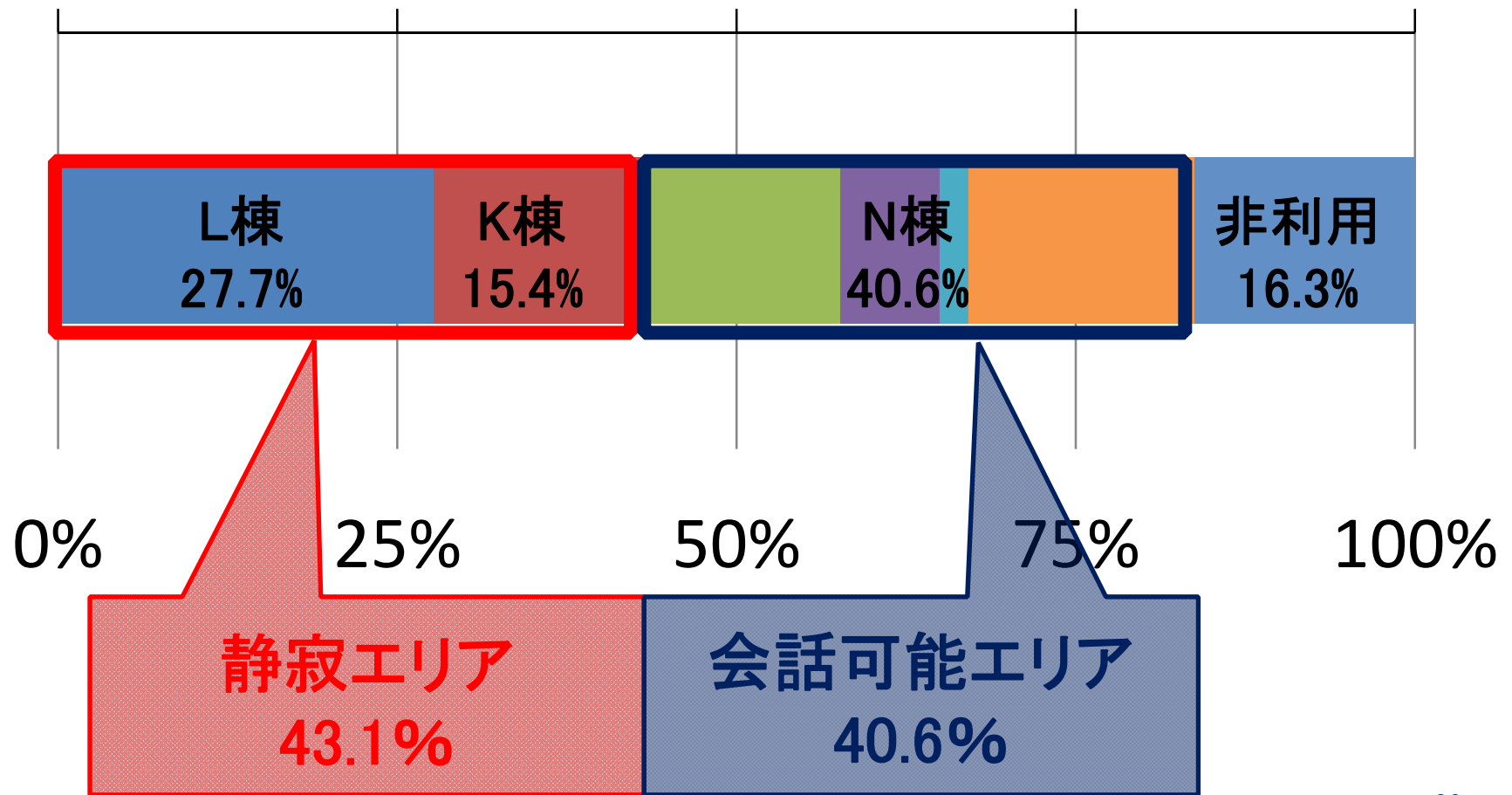
学生を中心に見た「場所としての図書館」と機能

その2:

# 「学習」のための図書館サービス： ラーニングコモンズモデル

# 学習場所についての質問(調査①)

Q: 図書館での学習に最も好ましい場所は？



# 学習をサポートする図書館

- 学習のサポートはこれまでも行われてこなかった訳ではない
  - 1960年代の岸本改革(東京大学附属図書館)
    - レファレンスルームの設置
    - 指定書の強化

これらは成功したと言えるのだろうか？ 多分言えない。  
なぜか？

# 千葉大学では…

- リエゾン・ライブラリアン・プロジェクト(2006年から)  
「授業資料ナビ」(パスファインダー)  
図書館資料と授業を結びつける  
教師を介した学生(特に非来館学生)へのアプローチ
- 総合メディアホール(仮称)構想(1990年代末)  
図書館資源とコンピュータ資源のより密接な連携  
→これはすでにより意味を持たない？

# アカデミック・リンクによる千葉大学の教育改革

目的:「考える学生の創造」

「生涯学び続ける基礎的な能力」「知識活用能力」を持つ学生の育成

## アカデミック・リンク

「学習とコンテンツの近接」による能動的学習の実現  
コンテンツ構築・提供、情報基盤、人的支援、学生のニーズに  
適した学習空間の統合・連携による学習・教育の革新

アクティブ・ラーニン  
グ・スペース

コンテンツ・ラボ

ティーチング・ハブ

千葉大学中期目標・計画<教育方法改善への取組、アクティブ・ラーニングの重視>

## 大学に対する社会的要請

- 知識基盤社会、学習社会における市民の育成
- 高等教育のグローバル化の中での質の維持・向上
- 職業人としての基礎能力、創造的人材の育成

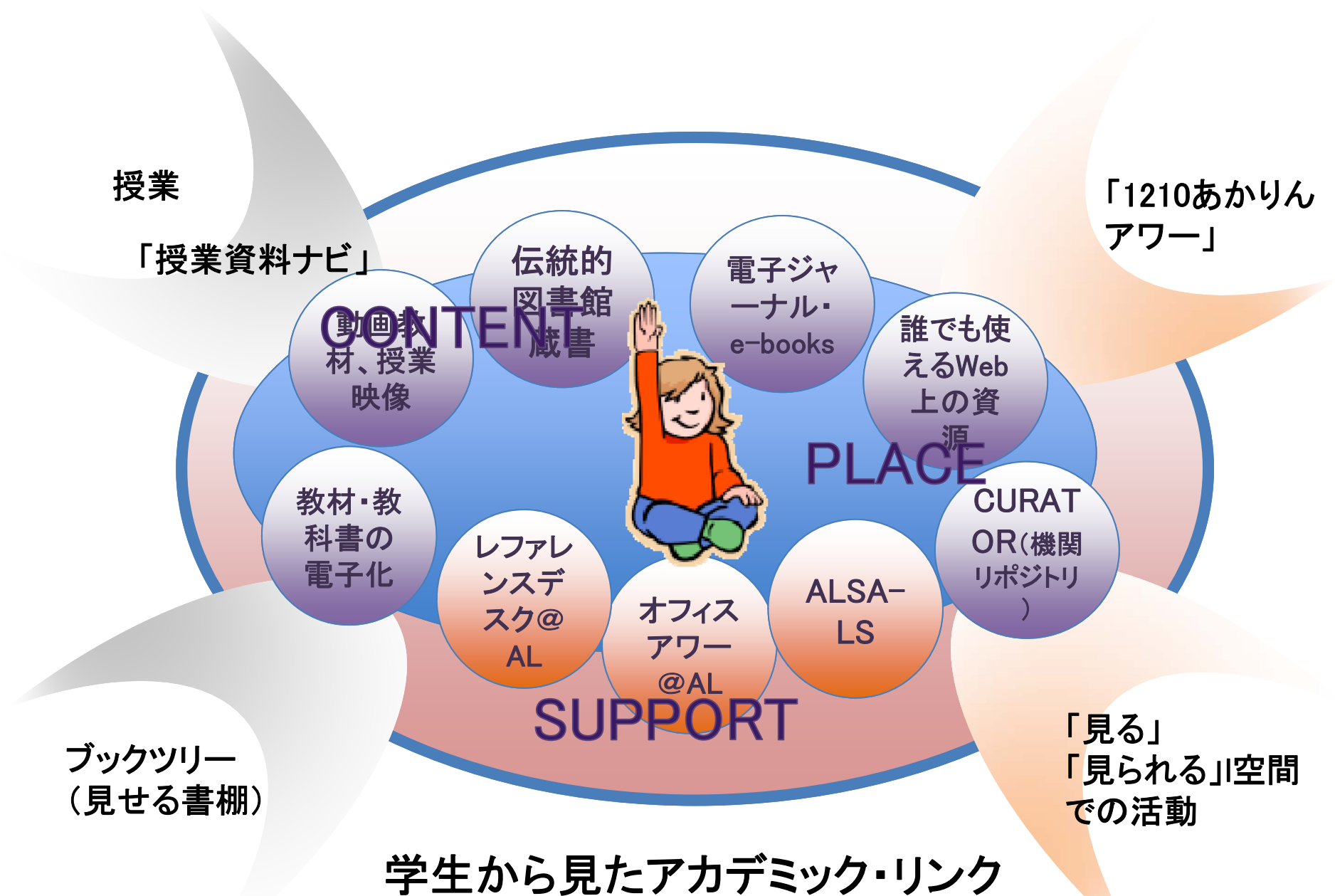
「学士課程教育の構築に向けて」(平成20年12月24日、中教審答申)

## 学生のニーズ

- 自由に使える学習スペース
- 文章作成力、ディスカッション能力、問題解決能力
- 英語によるコミュニケーション能力

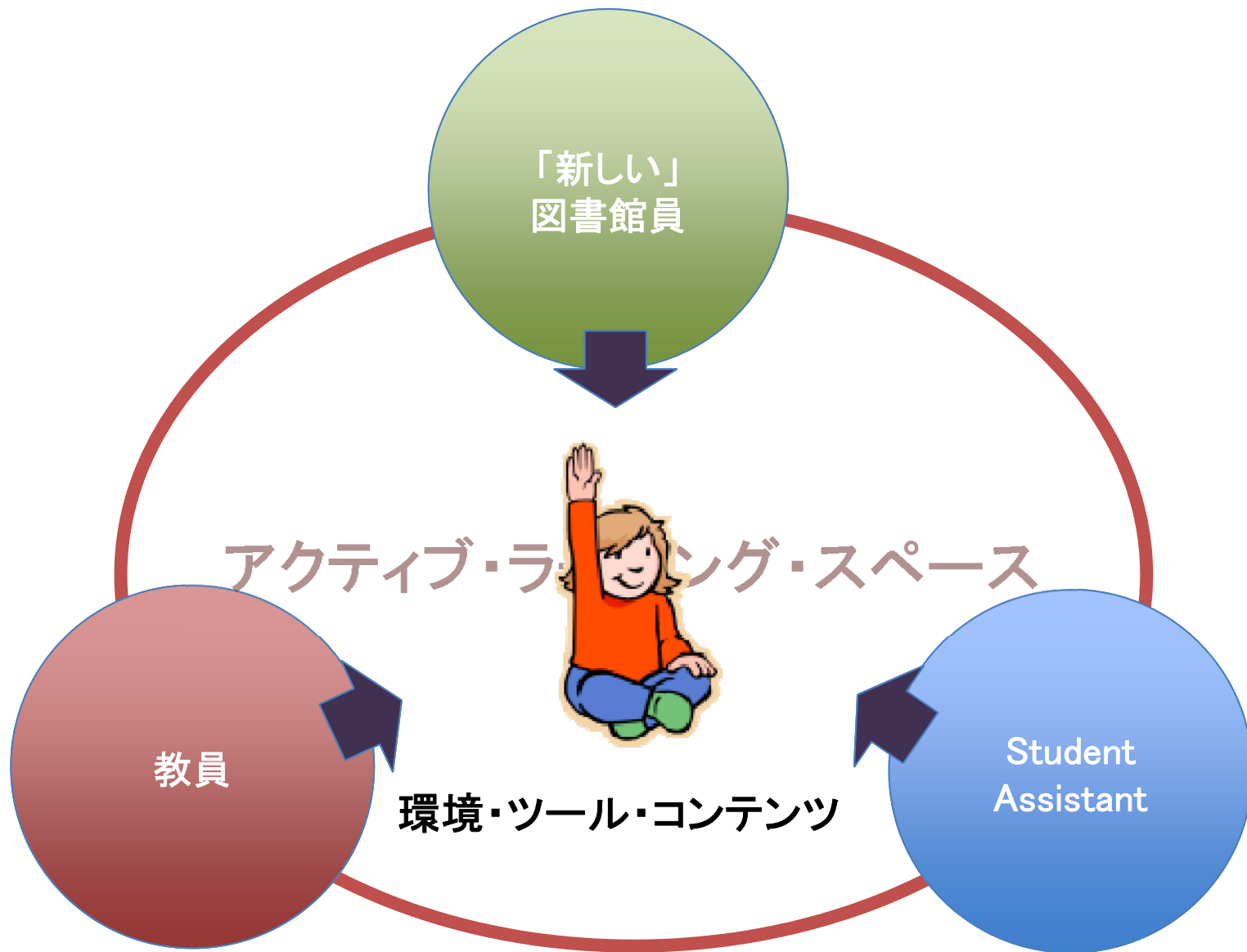
「千葉大学の教育・研究に対する意識・満足度調査報告書」(平成21年度)





## 学生から見たアカデミック・リンク

「学び」に導く刺激にあふれた場所, 学びの基盤としてのコンテンツ, 人的サポート



その4 ささやかな本論

# 大学図書館員がこれから強調すべき新たな役割

# 学習サポートの方向性

- 「学生に望まれる学習サポート」はどのような方向にあるのか？ → **学習(修)そのものへの関与**
  - 例えば、キングスカレッジ図書館の”Research Support”
- **授業との密接な連携**
  - 「授業資料ナビ」(千葉大学): 授業単位のパスファインダーの作成、教員と図書館の連携の基づくもの。
- 「一対多」ではなく「一対一」になるようなサービスの提供
  - 例えば、レポート執筆を支援するライティング・センター
  - これらの前提として、図書館員は匿名であってはいけないのではないか？
  - カウンターの中にとどまっていけない。

# 「研究」との関わり

『我が国におけるオープンサイエンス推進のあり方について』(2015年3月, 内閣府, 国際的動向を踏まえたオープンサイエンスに関する検討会)

公的研究資金による研究成果(論文、研究データ等)の利活用促進を拡大することを我が国のオープンサイエンス推進の基本姿勢とする。

★国立国会図書館, 大学図書館の役割への期待が表明されている。(長期保存の担保)

# 「研究」との関わり

- 図書館と研究の関わりは、これまで研究の「アウトプット」との関わりに限定されてきたが…
  - 機関リポジトリの将来は？
  - 研究の開始から終了までのプロセス全体に関わるような支援の必要性
- URA機能との関係（URAこそ図書館員の次の仕事？）
  - 図書館の仕事か，図書館的なスキルを持っている人の仕事か？

# 統合イノベーション戦略

(2018.6.15閣議決定)

- 機関リポジトリを活用した研究データの管理・公開・検索を促進するシステムを開発し、2020年度に運用開始

# 研究との関わり: 「知の創出」への関与



California Digital Library(UC)

- Plan: データ管理計画(DMP)作成のためのツールの提供
- Collect: 研究データ共有のためのセルフサービスツールの提供
- Manage and Share: 永続識別子の生成と管理, リポジトリでの研究データの蓄積, 管理, 共有
- Publish: オープンアクセス出版, データ出版



# 研究との関わり: 「知の創出」への関与



Researcher Unbound (NUS Library)

1. 研究のアイデアの定式化
2. 文献探索
3. 効果的な研究の組織化, 分析, 管理(データを含む)
4. 適切な形での情報源の利用と引用
5. 効果的な共有のための研究成果の公表と伝達
6. 社会への還元(特許など)
7. インパクトを測定し, 研究の可視性を高める

# 「資料提供／利用形態」に基づく サービス類型化からの脱却の必要性

- テクニカル・サービス／パブリック・サービスでは効率的なサービス展開は不可能
  - 利用者のタイプとニーズによる類型化か？
    - 研究者を対象とした業務／学生を対象とした業務
    - それ以外に組織としての図書館の管理業務

## 組織の形態

- 「専門職」組織は本質的にフラットでなければならない。
- 組織管理業務は本質的にフラットではできない。
- 従来の大学組織との整合性は？
  - 「専門職」部門は限りなく教員組織と近くなる

## さて、当面の課題

- これまでやってきた業務は当面残ると考えざるを得ない(先細りとはいえ)
- 今後の発展可能性がある新しい仕事はどんどん出てきている→「キュレーション」「ファシリテーション」
- マンパワーは限られている

⇒ **プライオリティ**に基づく仕事の選別しかない

# とりあえずのまとめ

- 図書館で行われる人的支援の中心は学生の能動的学習(あるいは学生のリサーチ)のサポートである
  - 単なる利用指導を超えて。ライティングセンター機能によるアカデミック・ライティングの指導→図書館員の教員化か？学習支援専門職化？
  - リエゾン・ライブラリアン(教員との連携の強化)
  - 多様な人材のとりまとめ
  - 学習用コンテンツ(教材)の構築＝ライセンス処理を含む

ここ数年の先導的<sup>1</sup>大学図書館の活動でモデルは確立された。

# 学習における人的支援の考え方

- 大学において学習をサポートする人材は図書館員だけではない
  - 学生 (TA, SA = ピア・サポート)
  - 教員
  - 伝統的な意味での図書館員とは異なるスキルを持つ職員

**多様な人材が混在することによって新しい図書館は、はじめて機能する**

# 研究における人的支援の考え方

- 何が求められ、何ができるのか？
  - 現時点ではモデルはない。
  - 図書館員に対する期待は高い。
  - 学習支援とは異なり、全ての大学（図書館）に当てはまるようなモデルの構築は難しい。

# 人材の多様性が必要

- コアとしての図書館情報学の基礎知識は当然必要
- しかしそれしかないと多分困ることになる。
  - 多様な人材を備える必要性
  - アウトソーシングは「最低ライン」の仕事をこなすためであるものであって、全面的なアウトソーシングは「大学」にとって自殺行為に等しい
  - しかし、同時にアウトソーシングしなければ、必要なサービスを提供するための人材の集約化はできないだろう



# これからどうなる！？

- 図書館員の役割は当面広がると考えるべき
  - なぜなら、アメリカの大学図書館に比べると、日本の大学図書館はたいしたことをしてこなかったので、新規開拓の余地があるから。その新規開拓が今日の大学にとっては重要。
- しかしながら、際限なく拡張することは不可能であり、あるターニングポイントで縮小の方向に動くことになる
  - なぜなら、図書館以外の場所で、これまで図書館がおこなってきたことの多くが実現してしまう可能性があるから。
- 図書館員の役割として「何を残して何を捨てるか」を見極めることができる大学(図書館)と図書館員だけが生き残ることができる

# 「専門学位を有したライブラリアン」

- 平成26年度の文部科学省による「スーパーグローバル大学創成支援」の公募要領には、ガバナンスの観点から事務職員の高度化に取り組んでいるかをたずねる項目があり、そのなかに「**専門学位を有したライブラリアン**」が例としてあげられている。同要領のQ&Aによれば、これは図書館情報学の資格や学位に加え、別途自らの関心に基づく学位を有し、教育・研究支援をはじめ大学図書館全体のマネジメントができる職員を指している。

# まとめ

- **大学図書館員が持つべき「コアとなる知識・スキル」の再定義が必要**
  - 大学図書館専門職とは何ができる人の集まりか(研究支援／学習支援)
  - それをどのような形で養成するのか
  - 大学における大学図書館員の位置づけ

**「大学のミッションを実現するために、図書館(員)は何ができるかを考える」**

# 大学図書館の基本理念

大学図書館は、今日の社会における知識基盤として、記録媒体の如何を問わず、知識、情報、データへの障壁なきアクセスを可能にし、それらを活用し、新たな知識、情報、データの生産を促す環境を提供することによって、大学における教育研究の進展とともに社会における知の共有や創出の実現に貢献する。

(第63回国立大学図書館協会総会にて採択)

# 国立大学図書館協会 ビジョン2020解説

[http://www.janul.jp/j/organization/minutes/research\\_meeting/janul-2020vision\\_commentary.pdf](http://www.janul.jp/j/organization/minutes/research_meeting/janul-2020vision_commentary.pdf)

ぜひ読んでください！